

ふるさとの鼓動 北に生きる心 むすんで

こぶし

第122号

発行責任者：横井 正人

特定非営利活動法人 民族歌舞団 こぶし座

TEL/FAX: 0 1 3 8 - 5 4 - 2 8 5 9

E-mail: kobusiza@m19.alpha-net.ne.jp

2006年8月24日発行

編集：機関紙局

北海道函館市陣川町 122-172

年3回発行

http://www.aa.alpha-net.ne.jp/kobusiza

主な内容

- (1) 記念公演を終えて
- (2) 記念公演を振り返って
- (3) 夏の太鼓・笛講座
- (4) 会館前に看板設置

創立40周年記念公演を終えて

―「北の漁師の昔語り」に向き合って―

NPO法人

民族歌舞団こぶし座

理事長 横井正人

創立四十周年記念公演ではご来場下さった皆さんはじめ、「成功させる会」そしてご支援いただいた皆さんに心より御礼申し上げます。本当にありがとうございました。開演に先立ち、「成功させる会」代表の市川団四郎さん（函館子ども歌舞伎・主宰）が座への期待を込めて「挨拶くださり、公演の最後には「入会」の有志が「江差のもちつきばやし」で、取り組んできた想いを踊りに込めてお祝いの餅をつきあげ、観客の手拍子と歓声で一体になった舞台上で締めくくることができました。私達も心を通いあわせる舞台を創ることができ、嬉しい気持ちでいっぱいです。

この公演はこれまでの座の歴史を受け継いで北海道にし



すっかりと根ざすため、私達が作品創造の担い手として第一歩を踏み出した公演でした。どんなに厳しくとも、公演活動を継続させながら時代に向き合える新しい作品を創りあげ、函館での記念公演を力に全道に広めていきたいと準備してきました。地元函館の南茅部で漁師として営みを続け、仲間と共に神楽を継承してきた佐藤正則さんの生き方にこそ、現代の私達がこだわり続けたい『人間らしく生きる』という根源的な暮らし向きがあることに感動し、佐藤さんの半生を作品にして伝えたいと「北の漁師の昔語り―神楽とともに―」を創り舞台に上げることができたことに特別な喜びを感じています。

稽古は漁師の心意気、家族への愛情、神楽へのこだわり、戦争への怒りなど一つひとつのことを深め身体に積み上げる作業の繰り返しでした。あの時の神楽舞は一生忘れ



られません：…」と語る場面では、神楽囃子の音が佐藤さんの胸中に一体どんなふう聞こえたんだろうと考え悩んだりもしました。そしてようやく台詞が自分の言葉として身について来たときに、私達が作品を創りあげているという実感が湧いてきました。

この作品は「鱈釣り口説き節」で始まります。私が入座



したての二十二歳の時、前代表の國田に連れられて南茅部に取材に行き荒木恵吾先生（南茅部町文化保護審議会会長―今年二月逝去）に説明を受け初めて知った歌でした。先生は南茅部や道南の歴史を長年にわたり調査・研究されてきた方で「鱈釣り口説き節」の保存会を作り地元で生まれた民謡を残して広めたいと尽力されてきました。今回の作品を創るにあたって何度か取材に伺い、お話を聞かせて頂きました。荒木先生には、是非この歌を聴いて貰いたかったと残念な想いでした。

公演後に改めて佐藤さんとお会いしたのですが、八十歳の年齢にしてなお、現役の漁師として昆布漁をすることにこだわり続け、神社の石段で毎日、足腰を鍛えていると話していました。佐藤さんの漁師としての誇りと前浜への愛情が「木直大正神楽」を郷土の芸能に育て、たくさんの人達に生きる勇気を与えてきたのだとつくづく思いました。

この記念公演に寄せられた皆さんからの感想やご意見をしっかりと受けとめ、北海道の「こぶし座」として『生きる喜び・働く誇り・明日への夢』を語り合える作品づくりを励んで参ります。

今後ともいっそうのご支援をお願いしてお礼のご挨拶と致します。



創立40周年記念公演を振り返って。

この度の記念公演は、こぶし座後援会を柱にした実行委員会形式の「こぶし座公演を成功させる会」の主催で行われました。取り組みを中心的に支え続けた仲間を代表し三人から、そして、記念公演という大きな舞台を初めて経験した座員の想いをお伝えします。

「確かさ」
かけがえの無さ」
際立つ！

こぶし座40周年記念公演
こぶし座後援会
会長 三浦恒雄

素晴らしい公演でした。幾多の困難を乗り越え、ひたすら民衆に依拠し、真面目に生きてきたこぶし座の40周年を飾るにふさわしい感動的な舞台でした。
公演が始まるや、驚きの声や励ましの掛け声、そして舞台と会話する人までいて、あつという間に舞台と客席が一体となりました。当初から、街角や職場で公演し、観客の心を素早く引き寄せ、ともに舞台をつくらせてきたという歴史が見事に生きています。
この観客の信頼をかち得ている大きな要素の一つは何と云っても『民族芸能』にあると思います。今回も現地へ出掛け、又現地から来てもらいそのものの習得に努めています。芸能に込められた歴史や



思いは現地の人たちとの交流で、深く伝わります。「秩父屋台囃子」…日本一素晴らしいお囃子で日本一難しい！…足掛け3年目の取り組みで初めて一般公演で演奏…昨年から中学校公演では演奏…現地で祭り見学、習得 現地の人に数回指導をうける…今年も指導、点検をうける…あの、速く細かく最後まで連続の小太鼓のリズムに表情があると言われ、その完成に精根傾ける…明治政府に抗した秩父の人たちの歴史の思いをお囃子に込める…公演のハイライトとなった見事な演奏は、座員のたゆまぬこだわりの努力と



現地の人たちの応援の賜物です。
「三本柳さんさ踊り」でも「登山ばやし」「北の漁師の昔語り 神楽とともに」「江差祭りばやし」でも全て現地の人たちから習得し、そして努力を重ね、更に点検を受けて本物”として舞台にあげています。この労苦は誠に貴重です。たくさんの人たちの思いが込められ、深い舞台になるのです。これがこぶし座の真骨頂で、客席から強い共感が帰ってきます。
今回、こぶし座を理解し、信頼を寄せる同じ芸能人の市川四郎師を委員長に頂いた実行委員会の働きも見事でした。こぶし座と一体になり、

時間を惜しんで動きまわりました。非常に献身的でした。若い人たちの参加もあり、活気に溢れました。立ち見が出るほどの満席にしました。意欲にあふれ、こぶし座、観客と一体感をつくりだした「もちつきばやし」は実行委員会の意気込み、働きを象徴する素晴らしいフィナーレでした。このような実行委員会の活発な活動、公演成功はこぶし座が地元地域と密接な関係を築いてきて、愛されている証左でもあります。

この公演でこぶし座の 方向の確かさ”と 存在のかけがえの無さ”が一段と証明されました。そして、支える人垣もふくらみ、これから”にも多大な励ましを買ったと思います。
ありがとございました。

**力強い四〇人の仲間と
成功させる会
事務局長 橋本かおり**



【満席の公演会場】

ていきます。期待に胸が高鳴りました。会場係の「上までびつしりだよ」の声に中をのぞきに行きました。客席を見上げる本当に二階席の一番後ろまでびつしり人が座っています。「本当に満員にできたんだけ胸が熱くなりました。地元とはいえ、こぶし座の函館での大きなホールでの公演は三十五周年記念公演以来です。今回のホールは八〇〇人入るとほとんど満員です。過去の実績から見ても入場率は七七八割なので、八〇〇人動員するには券を一〇〇〇枚売らなくてはなりません。最初一〇〇〇枚は途方もない数字と思えました。しかし、今回四〇人の実行委員という力強い仲間がいました。二〇代から七〇代まで、創立以来の付き合いの人からこぶし座を観たことのない人まで、実に様々な人達が公演の成功という目標に向かって心を一つにしました。

私は今回初めての事務局長でした。実行委員も二回しか経験がありません。「事務局長は最終的に一〇五〇枚売れました。公演後、会う人会う人に「よかったよ」と声をかけられました。公演を通して新たに人とつながりもできました。こうして四〇年あちこちでこぶし座は人と人をむすんできたのでしょうか。
次の函館での公演は五年後かどうかはわかりませんが、ここできたつながりを大切に次につなげていきたいと思っています。

こぶし座に
かかわってみて
成功させる会
横田友美

こぶし座40周年記念公演を成功させる、お手伝いをさせてもらい思った一言はこれしかないと思います。それは、「ありがとう」という感謝の言葉です。



私が産まれるずっと昔に豊作・大漁を願うことや、喜び、楽しさを踊ることや歌うことなどで表現した人達にまず「ありがとう」と。その人達の大切な思いや文化を守り、受け継ぎ続ける、全国各地の人達にも「ありがとう」と。そして、こんな素晴らしい文化を全国各地でふりまいて、こぶし座員の人達、こぶし座公演を成功させる手伝いや応援している人達にも、

「ありがとう」と。少し大きいですけど、こぶし座40周年記念公演を見て改めて思ったこと、それは日本人に産まれて日本で育って良かったと思えたことです。

私の夢は世界各国を旅することです。日本の裏側でいろんな文化や歴史をたくさんの人種の人達に伝えることが出来たらいいと思います。

「少しでも人の役に立てた方がいいや」と軽い気持ちで参加させてもらいました。軽い気持ちで参加したおかげでなのか、考えてみると今ではすべてが自分の役に立ててしまっている気がします。ある知人が「ダイヤモンドと同じで人は人でしか磨かれぬ」と教えてくれたことがありますが、こぶし座が光り輝き続けていれるのは、人と人との縁を大切にしているからです。私もそんな縁にかかわることが出来て嬉しいです。本当にありがとうございます。

成功させる会の皆さん
ご苦労様でした!!
お世話になりました。



【もちつき練習 / 職人さん...!?!】



【ちわ~、看板貼りです。】



【看板書き / レッドマン VS ブルーマン】

日々の一歩一歩を
着実に...
公演部
村田さつき

六月二十日、四十年記念公演当日、緞帳幕が上がり舞台上にのって舞台に踊りこんでいくと会場を埋めつくす観客の姿が目飛び込んできました。出だしは緊張感いっぱいでしたが、それを見た瞬間パツと一瞬にしてふぎとんでしまいました。後はひたすら懸命に舞台の上で今まで学んだことを表現するだけでした。演目が進むごとに客席から感じる共感の眼差しと励まし、時折おしよせる歓声、熱気につつまれた会場、最後の演目まで一気にかけてくれたという印象感と全てを出しつくしたという安堵感でなれば放心状態の中で幕がおりました。

送り出してロビーに行くと人また人の波の中に知っている顔がいくつも確認できました。いろいろな方々と交わした握手、その手のぬくもりを今もはつきりと思い出せます。この日まで一生懸命に公演を準備してくれた四十名の実行委員の人達や会場に足を運んでくださった皆さんに対する感謝の気持ちでいっぱいでした。

今回の作品の初演が地元函館での公演で本当に良かったと心底思いました。今思えば、自分の力不足を十分に自覚している私ですが、それでも見てくれる方々に少しでも喜んでもらえる舞台を届けたい。何よりも日本には素晴らしい芸能がまだまだいくらでもあるんですよと伝えなかった。先祖代々伝えられてきた芸能に込められた民衆の思いや願い、そして芸能の持つ力強さを共感し合いたいという気持ちと周囲の励ましでラストスパート3カ月の稽古を乗り切ることができました。

また、今回の公演に向けての現地取材を通して、どの芸能についてもかかわっている一人一人が愛情を持って取り組んでいることが言葉の端々や所作から感じられ、この人達の思いも自分を通して舞台



にのせるんだという決意にも似た気持ちを持って帰路についたことが思い出されます。公演前の稽古が第一の山場なら公演後の今、秋の一般公演に向け第二の山場を迎えています。公演があつた六月、座歴5年目の一歩を踏み出しました。その日々の一歩一歩を着実に積み上げ、北海道の短い夏をより、アツク「過ごしたいと思う今日この頃です。



